楊倞の『荀子』天論篇注について

島　一

よく知られているように、唐代後半期、楊倞なる人物によって書かれた『荀子』注は『荀子』最古の注で『荀子』理解に大きな示唆を與えてくれる。さて、私見によれば、そこには、楊倞自身の思想がみえている。[1] その中の一篇天論篇の注も同様でそれは唐代後半期の天人論の歴史の中で一定の位置を占めていると思われるのである。

楊倞は、世界の萬物を主宰する天の職任を次のように説明している。

天に自ら常行の道有り。[2]

天には人間と違った一定の法則性があるというのである。

爲さずして成り、求めずして得、四時行なわれて百物生ず、天の職任此くの如し。豈堯桀の間に愛憎せんや。

それは、人間世界の興廢に感情を持たず、無爲のうちに四季を循環させて萬物を生成している。そして、この天に對する人間のかかわり方を次のように説いている。

雩は雨を求むるの禱りなり。

或るもの問う、旱にして雩せば卽ち雨を得。此れ何の祥ぞやと。

對うるに雩せずして雨ふると同じきを以てす。求めて得るに非ざるを明らかにす。周禮司巫、國多いに旱せば、則ち巫を率いて雩を舞うと。

日照りにおける雨ごいの意味について、雨ごいと降雨の因果關係を否定する。

求むるを得とは、求むる所を得るなり。言うところは此れを爲して以て急を災害に示し人の意は順いて以て政事を文飾するのみ。人の情に順いて以て文飾と爲せば則ち害なし。淫りに祀りて福を求むれば則ち凶なり。

日照りという人間社會の危機にその感情に順ってそれを文飾するという政治的な意味があることを忘れてはならない。雩せずとも雨は降るものだ。

また個人の運命と天について。

節とは遇う所の時命を謂う。

天に在りとは富貴を謂う。

己れに求めて苟しくもせず。故に日々進む。

徼倖を望みて己れに求めず。故に日々退く。

人間が個人として遭遇する運命は、「富貴は天氣に在り」とされているように個人の力を超えたものとみられがちだ。しかしそこに徼倖をねがって自らの努力を放棄すれば、事態は一層悪くなるものだ。逆に自ら主體的に努力することで一定の成果も期待できる。

そして、楊倞は天に對するよう一般的な態度について次のように論じている。

天を尊大にしてこれを思慕して其の豐富を欲するは、物をして蓄積して我れこれを成制するに孰與れぞ。

天に從いて其の盛德を美むるは、豈天の命ずる所を制裁して我れこれを用うるに如かんや。曲るが若き者は輪と爲し直なる者は桷と爲して材に任じて用うるを謂う。

時に望みて待つとは農夫の歲を望むが若し。

春生夏長の候に應じて時を失せざるに孰與れぞ。

物の自ら多きに因るは其の知能を馳せてこれを化して多からしむるに如かず。后稷の種を播くが若く然り。

萬物を得て以て己が物と爲さんと思うは、物を理して皆その宜しきを得て失喪する所有らざらしむるに孰與れぞ。

萬物に對して觀念的に對應してゆくよりも現實の物やその生成に對して現實的に對應するのがよい。

物の生ずるは天に在りと雖もこれを成すは卽ち人に在り。此れ皆理平豐富は人の爲す所に在いて天に在らざるを謂うなり。若し人を廢して妄(みだ)りに天を思わば卽ち心を勞し思いを苦しむると雖も猶お益なきなり。

一九二

萬物を生成する原因とそれを完成する行爲とは異なっている。その原因は天に在り、それを完成させるのは人間だ。この點をわきまえて、人間社會の秩序や物の豐富さが人間の行爲によることを知るべきだ。この點を忘却すると、どれだけ心思を費やしても無益である。

言うこころは天道深遠なりと雖も至人曾て措意測度せず、其の理に益(えき)無きを以てなり。若し其の人に在る者を措きて其の天に在る者を慕わば是れ［天と］職を爭うなり。莊子曰く、六合の外、聖人存するも論ぜずと。

六合の外を聖人は論じないと『莊子』が言っているように、深遠な天道を聖人は論じない。その理は、人間にとって無益であり、それを論ずることは天と職を爭うことになる。

天道知り難し、故に聖人但だ人事を修めて慮を天を知るに務めず。

聖人は知り難い天道を知ろうとはしない。大切なのは人事である。

耳聲を辨じ目色を辨じ、鼻臭いを辨じ、口味を辨じ、形寒熱を辨じ、其の能くする所を療養す。皆以て物を措して互相に用を扃す能わず。…官とは猶お任のごとし。天の付任する所に此くの如き有るを言うなり。

人間の母體に備わる感覺器官の感覺上の辨別、それを相互にとりかえる

ことは出來ない。それは天が人間にそのように付任したものである。楊倞はここで明らかに人間の生活に天の主宰性を認めている。

心中の空虛の地に居りて以て耳目鼻口形の五官を制す。是れ天形體の君と爲さしむるなり。

心が四體の中央で五官を制御するのは、天が心を形對上の君主とさせたからだ。

飲食衣服、人と類を異にす、裁してこれを用いて口腹形體を養わしむべし、故に曰く、其の類は非ざるを裁して以て其の數を養なうと。是れ天奉養せしむるの道此くの如し。

人間にとつて異類の物を裁成して自己を養なうこと、それを天養というが、それは天が人間を奉養させるやり方がそうだという意味である。ここに、奉養と言い、先に形體の君とならせたと言ったのは、いずれも人間の生活が、天の主宰のもとに置かれていることを意味するであろう。

其の自ら修行する所の政は曲さに其の治を盡くし、其の人を養う所の術は曲さに其の適を盡くし、其れ萬物を生長して傷害する所無し、是れ天を知ると謂う。言うこころは人事に明らかならば則ち天物を知らん。其の要は則ち曲盡ならん。

異類を裁成して同類を養なうにふさわしい政治を行なうこと、これが人事を盡くすことで、それによって萬物の生成が遂げられることになる。すなわち、人事を盡くすことが天を知ることになるのである。

此れ天を知るに務めざるは是れ乃ち天を知るを明らかにす。亦猶お大巧は爲さざる所に在るがごとし。天地の萬物を成すがごとし。若し偏(ひと)えに爲す所有れば卽ち其の巧小なり。大智は慮せざる所に在り。聖人無爲にして治まるが如し。若し偏えに慮る所有れば則ち其の智は窄(せま)し。

天を知るとは、知らない所を殘すことである。大智は慮せざる所有るが若しである。そこで具體的には、次のようにすべきである。

志は記識なり。聖人天を知るに務めずと雖も、猶お記識して以て知道を助くる有り。

天に記識する所以の者は其の垂象の文の以て其の節候を知るべき者を見る、是なり。……地に記識する所以の者は其の土宜の以て嘉穀を蕃恩すべき者を見る、是なり。……數とは春作夏長秋斂冬藏する必然の數を謂う。事とは時に順いて其の事を理むるを謂う。四時に記識する所以の者は時の數に順いて生長收藏せしむべき者なり。……知るとは其の生殺を知るを謂う。

天地・四時等人間を取り卷く世界に對してそれぞれ知るべきことと知らずともよいことがある。聖人はその知るべき範圍のことのみを知るよう務めるのだ。ところでその範圍とは、天によって與えられたものであろう。

星隧つは天地の變、木鳴るは陰陽の化、罕れは希れなり。……。其

の罕れに至るを以てこれを怪異と謂うは卽ち因るべし。遂に畏懼するは則ち非なり。物の旣に至りて畏るべき者は人の妖に在り。……三人祅の類は星隧ち木鳴るに比して淺近と爲す。然れども其の人に災害するは則ちはなはだ慘毒なり。……勉力は力役なり。時ならずんば則ち人怨曠多し。其の氣の感ずる所となる。故に生ずるは其の類に非ざるなり。……書とは六經を謂うなり。以て勸戒と爲すべきは則ちこれを明らかにするも、廣く萬物の怪を說かず。

星墜ち木鳴るという怪異な現象は天地の變・陰陽の化である。それは怪しむべきことであり、畏るべきことではない。それとは異なり人間の側の祅は畏るべきものである。代表的な人祅によって引き起こされる人の怨みはその氣の感應によって牛馬という異類が相互に生み合うという異常な現象を出現させずにはおかない。人祅による異類の生成によって人が勸戒と爲すべきことは經書に說かれているが、經書は萬物の怪異を廣く說いてはいない。このように楊倞は、人間の行爲が人間の世界で完結せず、それが自然界に變化をもたらすと見ているのである。

以上のように、楊倞は自然現象の異變が人間の側の異變によって起こるとみている。それは人祅と呼ぶ人間の異常な行爲がまきおこすものである。

右の楊倞の『荀子』解釋が完成したのはその序文によれば元和十三年十二月である。

この頃までにはおそらくすでに柳宗元・劉禹錫の天說・天論が執筆されていた。[3]

柳宗元は、韓愈の天の說に反論を加えて、天と人間の秩序は別のもので相互に關係がないと主張する。[4]

そして、劉禹錫の天論にみえる「天と人と交ごも相勝つ」の論もつきつめると自己の說に變わる新說ではないと言う。[5]

柳宗元の否定する韓愈の天人相關論について、楊倞は天と人とが別々の道によって運動しているとみる點で柳宗元の說と共通する。しかし、天の事物に對する主宰性を否定しないという點では韓愈の說に似ている。

楊倞によると、天は人をして天政をつかさどらしむる存在であった。自然界の萬物は天によって生成される。その萬物を人間は利用して生活するのだが、その生活が天によってもたらされたのである。そしてその中の人祅によって氣が反應して自然界には異類が異類を生むという現象が生じるのであった。人間の生活はそれのみで完結するのではなく、その生活の異變は氣を變化させる自然の世界に反映して異物を發生されるのであった。

天道について「天に自ら常行の道有り」と言うが、この人間の生活と天との關係を楊倞は明確には語っていない。時に異類は相互に生ずるが、全體としては常行の道があると言うことであろうか。ともかくこの點を理論的に整理して天の性格を再檢討すると、新たな天人相關說が唱えられる可能性が生ずる。

寶曆年間、進士に及第した劉蕡なる人物の大和年間の對策[6]はそれに當たろう。對策には、「冤痛の聲上りて九天に達し、下りて　泉に流る。鬼神悠怒し、陰陽これが爲に愆錯す。……仁壽の心下に感じ、和平の氣上に應ず。故に災害作らず、休祥荐（しき）りに臻る。……」とある。

してみると楊倞の理論は、柳宗元、劉禹錫によって打ち出された天人論を否定して再度天人相關論が登場する契機をつくったものとして注目すべきであろう。

注

① 拙稿「楊倞の「荀子」注と韓愈の儒教思想」（「集刊東洋學44」）参照

② 楊倞注の引用は以下「二十二子全書」本による。

③ 柳宗元や劉禹錫の評價は、侯外廬主編、「中國思想通史」第四編参照。柳宗元は元和十四年十一月になくなる。

④ 「柳河東集」16

⑤ 「答劉禹錫天論書」（「同右」31）

⑥ 劉蕡の傳記は、「舊唐書」一九〇頁、「新唐書」一七八頁参照。

（本學文學部教授）